Member's Forum

会員投稿の頁

U35

U-35委員会企画 3rd action
「建築と共有」活動報告
公開審査＆講評会
2016年2月20日(土) 13：30〜
会場：KIITOデザイン・クリエイティブセンター神戸

第1回U-35主催 学生アイデアコンペティション

審査員	猪熊　純	(成瀬・猪熊建築設計事務所 首都大学東京助教)
	前田昌弘	(京都大学助教)
コーディネーター	三谷帯介	(U-35委員会)

課題

『共のレシピ』

課題主旨文

スマートフォンは、発売以来、私たちの生活を劇的に変化させ続けている。SNSやシェアリングサービスなどネットワーク上での個人同士の自由な繋がりは、若者を中心に日常的コミュニケーションの重要な位置を占め始めており、私たちは「いつ・どこにいても」必要な情報や繋がりにアクセスできる自由を手に入れた。

一方、私たちの社会が古来より培ってきたコミュニティ母体（家族、集落、団地、公園、広場、学校、自治体、商店街、お祭りなど）の縮小化・希薄化・孤立化に対し、シェアハウスやFAB Cafe、エリアマネジメントなどは、既成の仕組みを掛け合せることで「場所に根差したコミュニティ」を再定義し、新しい共同体としての価値を生み出していると言える。

場の拘束から離れ、自由の身となった個の集合体が、敢えて場を共有することで生まれる豊かな繋がりの場（＝『共（きょう）』）とはどういったものだろうか。素材の持ち味を掛け合わせて料理するときの「×」（掛け算）のメソッドで、次世代の社会問題に鋭くメスを入れる、独創的で美味しい『共のレシピ』を期待したい。

最優秀賞（1作品）

「Bio-tope」
山口　昇　（京都工芸繊維大学大学院）

優秀賞（2作品）

「ショッピングモール×イエ」
近藤弘起　（東京理科大学）
平田　柳　（東京理科大学）

「流れ出すタイムライン〜繋がりたいFaceBook世代の為の集合住宅〜」
竹内和巳　（京都大学大学院）
林　和茂　（京都大学大学院）

特別賞（3作品）

「学生寮で過ごし、人と繋がるシェアドミトリー」
志萱侑太　（日本大学大学院）
山川大喜　（日本大学大学院）
千葉雄介　（日本大学）

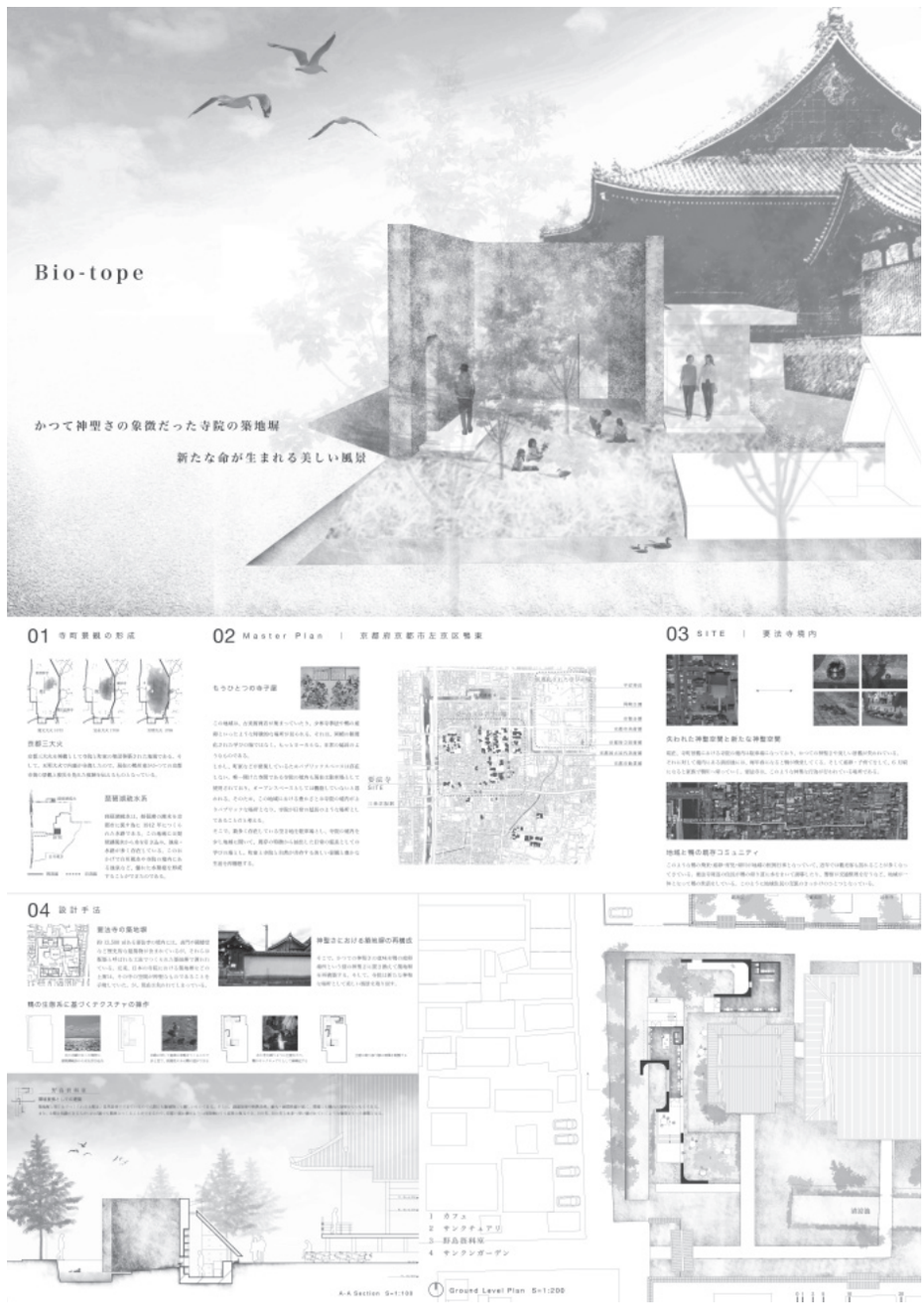
「一軒家×家事」
仲尾　梓　（東京理科大学大学院）

「小さな住宅×大きな住宅」
兼松陽介　（名城大学大学院）
上野友子　（名古屋工業大学大学院）

Member's Forum

会員投稿の頁

最優秀賞　山口　昇（京都工芸繊維大学大学院）　**「Bio-tope」**



選評

・「共」のレシピというお題に対して、住まい方や建物内でのコミュニティを取り上げた提案が多かった中で、そこで展開されている活動を緻密にリサーチした上で広い地域に対して薄いレイヤーで繋がっていこうとする提案は非常に共感できた。プレゼンテーションのレベルも高かった。（猪熊）

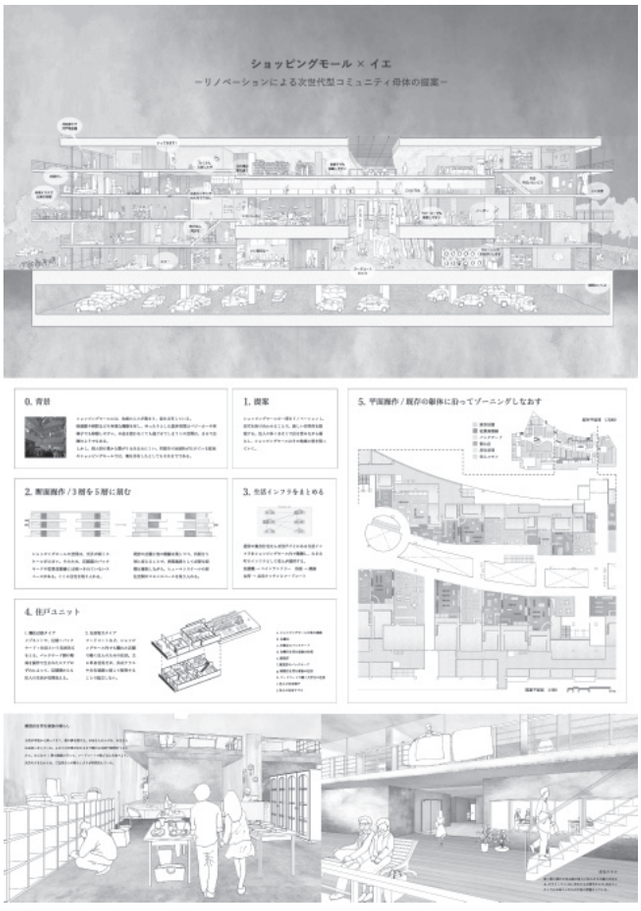
・鴨を介したコミュニティに着目し、市街地のオープンスペースのあり方を問うという興味深い提案である。既存の活動に加え、周辺のまちの文脈も踏まえて、提案を契機としてどのような新たな展開やつながりが生まれるか、ということがもっと掘り下げられていれば新たに建築物を挿入したことの説得力がより増したのではないか。（前田）

Member's Forum

会員投稿の頁

優秀賞　近藤弘起（東京理科大学）
平田　柳（東京理科大学）

「ショッピングモール×イエ」



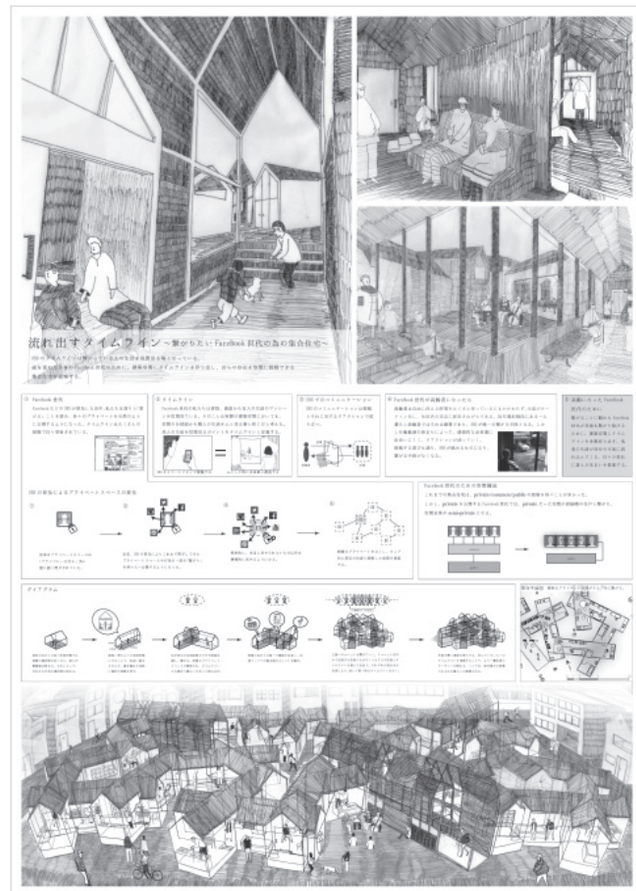
選評

・増え続けているショッピングモールという建築のプロトタイプに対して、疑似都市のような空間構成やプログラムの面白さを理解しつつ、「次世代」というコンペの視点に対して、いずれ廃れていくのではないかという問題提起をしている点を評価した。一見、本当に出来るのだろうかという驚きはあったが、前向きな提案ができていた。（猪熊）

・商店街のような空間が持つ濃密な地域性を敬遠する世代のライフスタイルをキャッチし、良くも悪くも現代の市場ニーズをよく捉えているショッピングモールというビルディングタイプに居住機能を挿入する、という提案が興味深い。そこに住むのが本当によいのか、よりパブリックな機能や都市インフラを挿入するのがよいのか、立地特性や周辺地域の状況も考慮した提案があれば、より良いものになるのではないか。（前田）

優秀賞　竹内和巳（京都大学大学院）
林　和茂（京都大学大学院）

「流れ出すタイムライン
～繋がりたいFaceBook世代の為の集合住宅～」



選評

・SNSを通じて変化しているコミュニケーションのあり方を読み解き「次世代」というテーマに落とし込んだ作品。中心がないネットワーク状のコミュニティを前提とする課題設定は評価でき、その視点を正確に建築に落とし込むプロセスや手法も丁寧になされていた。守られるべきプライバシーの空間について細やかに想像しながら設計に落とし込んでいくことを期待したい。高齢者の住まい方についても、人としての尊厳が大切にされるべきと考えている。（猪熊）

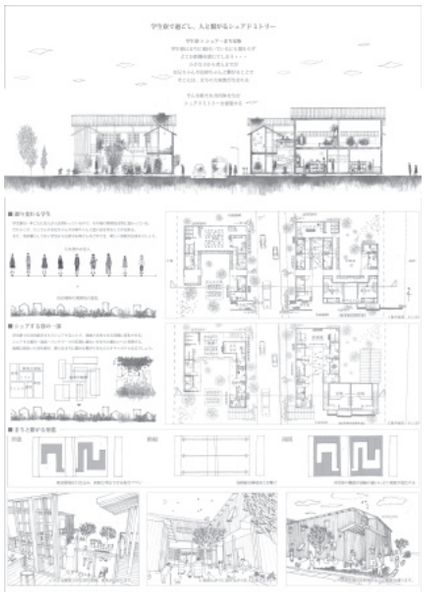
・プライベートを直接的にさらけ出すことがSNS世代の関係性の捉え方として妥当なのか疑問はあるが、課題に真正面から取り組んだ点は評価できる。SNS の良さは自分と他者、お互いの存在が認識されている感覚から生まれる安心感や満足感にもある。歴史的な都市では、例えば京都の町家街区やイタリアの中庭街区など、そのような「みる-みられる」の関係が巧みに組み込まれることで居住の安定が保たれてきた。（前田）

Member's Forum

会員投稿の頁

特別賞　志萱侑太（日本大学大学院）
山川大喜（日本大学大学院）
千葉雄介（日本大学）

「学生寮で過ごし、人と繋がるシェアドミトリー」

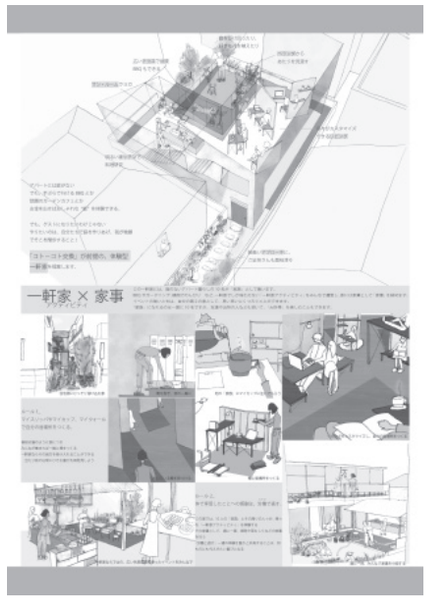


選評

・「住まい」を「まち」と共有することは中に住む人にとっても価値があることが大切で、プライバシーに対する細やかな配慮が今まで以上に求められる。シェアのために何かを犠牲に失っていることではない、という本質を理解していると感じた作品。場のイメージが具体的に描かれており、接続することでWin-Winな関係を築く事が出来ている点を評価した。（猪熊）

特別賞　仲尾　梓
（東京理科大学大学院）

「一軒家×家事」



選評

・あえて非定住者だけを集めるという提案に意外性があって興味深かった。利用者が建物に愛着を持てるような仕掛けや改修のコストの軽減等、提案に説得力をもたせるきめ細かい工夫についてもよく考えられており、空き家問題にも応用できそうな、今の時代にマッチした優れた提案である。そこに生まれるコミュニティの中で楽しく過ごす情景がイメージできた。（前田）

特別賞　兼松陽介（名城大学大学院）
上野友子（名古屋工業大学大学院）

「小さな住宅×大きな住宅」

選評

・玄関という、どの家にもあり社会との接点となる場所の隣に小さな空間を設け、あえて開く「見せの間」とすることでパブリックとつなげる案で、現実性が高く無理がない提案がきちんとできていた。そのプライベートの見せ方はまさに「Real Facebook House」とも言える。模型による丁寧なスタディの跡も窺える秀作である。（U-35）

審査にあたって

１次審査として審査員による全作品の書類審査を行い、上位３作品を事前に選定しました。また上位３作品の応募者には当日会場でプレゼンテーションをして頂き、ディスカッションを含めた中で総合的な評価を行い、最優秀賞１点、優秀賞２点を選定することとしました。
優秀賞とは別に、着眼点や提案内容において優れていると判断された３作品を特別賞として表彰しました。
応募頂いた作品は総じて、オリジナルな着眼点やアイデアに基づいており、プレゼンテーションのレベルも高かったため、審査は非常に難しいものでありました。
誌面の都合上、全ての作品をご紹介できないのが心苦しい限りですが、どうかご容赦ください。

Member's Forum

会員投稿の頁

総評

猪熊　純

「共」というものを成立させるための提案として、「プライベートの領域をなくしていく話」「ボランタリーでも良いから何か差し出す話」「学生目線で自分が共有できそうな同世代的なもの」などがありがちである。けれども、本当に手助けが必要なのは、お年寄りや子育て世代、障がいのある人ではないだろうか。

また、特に建築・空間に対して、「共」というのは必ずしも密着したり近づけたりするような「一緒に居るから幸せでしょ」というものではない。程よい距離の調整機能が建築も含めて発達していくことが理想である。ビジネスの話は提案として出てこなかったが、助け合いでは成立しないという現実問題もある。

最優秀賞の「Bio-tope」は、コミュニティ・デザインのきっかけが鴨という生き物であるという点がユニークだが、お祭りであったり、ある種イベント的なものに対して、そのための建築が必要なのかという点が課題で、もともとある資源をきっかけに、新しい地域づくりのために建築・空間がどのように価値が生み出せるかまで踏み込んで欲しかった。

SNSは情報やつながりにアクセスできる自由はあるが、いつでも止めることができるのが特徴である。基本的には生活の中の「ハレ」のシーンを共有することで、もともとプライベートだったと思われていたものを作り込んでパブリックにしているだけで、本当のプライベートは見えていない。今の高齢者のためのグループホームなどを調べてみると、大半はプライベートがなくてドアもあきっぱなし、管理するための空間構成によってプライバシーを失ってしまっているのが問題だと思っている。その現状に妥協してしまって受け入れて生活しているところに問題の本質があるように思う。

LT城西を例にとってみると、ワンルームに住んでいる友達の家に遊びに行くと、プライベートな生活風景が見えてしまうが、シェアハウスだと、プライベートな個室の空間には他人が入らないという傾向がよくわかる。共有できる場が増えれば増えるほど、プライベートな場は閉ざすことができるしコントロールできるようになる。

プライベート部分とパブリック部分の面積比率は、あくまで不動産的な事業性にのっとってやっているため、一般的なリノベーションでやるのと変わらないが新築であるため広いパブリックスペースが確保できた。

ショッピングセンターは、市場のニーズに合わせてよく出来ていると思っており、まさに疑似都市の様相である。

住まいを挿入することにこだわらずに、中のコンテンツを変えることでブランディングする手法もあるのではないか。衰退する商店街の再生を取り上げる学生も多いが、実際にはビジネスとしてリスクを取り、環境を変えていかないと実現できないという課題もある。

なぜ「シェア」なのか

住まいも、平均世帯人数が３人を切る時代になっており、オフィスも分業よりはコミュニケーションによって新しいモノを作る時代になっている。福祉施設も少子高齢化社会が進む中で相互ケアや自助が必要とされてきており、もともとの建築では対応しきれないことが増えてきている。商業でも、「買う」ということより「ものがたり」や「学び」が重要になってきている中で、どういうビルディングタイプにも共通して、求められている考え方が変わってきているだろうというのが我々の意識である。

前田昌弘

建築とコミュニティ、まちづくりの関係について研究している。例えば最近、京都では、地蔵盆という昔からある行事が、現代のまちづくりの中でどのように再評価できるか考えている。地蔵盆では町内の人々が年に一回集まって町内の安全を祈願するのだが、普段のお地蔵さんの管理を通じた人間関係や地蔵盆当日の空間の使われ方に着目すると、色々と興味深いことがみえてくる。地蔵盆には、京都のまちに特有の両側町コミュニティにおける人間関係を調整する様々な工夫が埋め込まれており、単なる伝統行事という枠を超えた高度な社会的な機能が備わっている。地蔵盆の日には、近年みられなくなった、町家の格子戸を外したミセの間の空間利用が行われ、そこでは多世代の交流が生まれている。さらに、地蔵盆は時代とともに進化し続けており、例えば、京都のまちなかではマンションのエントランスホールに地蔵盆のためのスペースが設けられているなど、地蔵盆とまちづくりは、相互に作用しながら持続している。

最近、「シェア」がブームだが、例えばシェアハウスのように人の生活に深く関わるものを調べていると、他者と何をどこまで共有でき

LT城西　　写真：西川公朗

Member's Forum

会員投稿の頁

ると感じるか、その許容範囲には世代によってかなり差がある。また、東北の震災復興の研究に関わっていると、平時と非常時の関係についても強く意識するようになった。災害復興において平時−非常時の連続性をどうやって確保するか、あるいは今回の「Bio-tope」の提案や京都の地蔵盆にみられるような非日常のコミュニティをいかに平時のまちづくりに展開するか、という視点も重要である。このように、人と人の関係や個々人で異なる感覚、さらにはそれらの時間経過や状況に応じた変化といったファクターを建築が担うことになってきており、それに際してわたしたちはもっとデリケートになるべきであると感じている。

コミュニティ・デザインへの期待

学術用語としての「コミュニティ」は少なくとも100年近く前からあるが、最近の日本では再びブームになっている。その背景には、社会の不安定化や自然災害の多発等に起因した時代の変化や人々の価値観の変化がある。コミュニティという言葉はその指し示す内容が曖昧なまま使われることが多いが、「地域性」（コミュニティの範囲を規定する土地や地理的な範囲）、「共同性」（人と人の関わり、人が何かを共有することで生まれるもの）がコミュニティの２大要件であると言われている。近代以前は、農村共同体のように、地域性と共同性は一体的かつ不可分なものであったが、近代化・都市化や、交通・情報技術の進化により、それらが分離し、個別進化してきた。そのことが既成のコミュニティを破壊してきたという側面はあるのだが、これからの時代は、新しい交通・情報技術を私たちがうまく取り込んで「飼い慣らす」ことにより、既存の環境を活かしながらコミュニティを未来へと繋いでいくことが必要ではないか。一方で、コミュニティの健全なダイナミズムを育むという意味では、既存のコミュニティを無批判に受け継ぐことには慎重になるべきである。その意味でも、コミュニティ・デザインでは、何を「共有」するのか、しないのかを曖昧にしないことが重要である。そして、「地域性」と「共同性」のどちらか一方ではなく、お互いが影響しながら共に進化していかなければならない。

地蔵盆の風景　写真：前田昌弘

U-35委員会

「共」のレシピ　に込めた思い

今回のコンペの主催およびU-35 3rd Action「建築と共有」の企画にあたり、私たちは建築設計に関わる立場として、いろんな人とつながりを持つことが出来る現代の社会で、どのような空間やアイデアを提案できるのだろうかという問題意識がありました。

またそういった社会の変化が進む中で、次世代の視点というテーマを今の学生世代に問いかけることで対話を試みたいと考えました。

私たちU-35委員会は、これまで1st Acton「建築と木材」（※）、2nd Action「建築と拡場」（※）や、異業種で活躍する同世代を巻き込むtalk batonの試み（※）など、建築と「社会」との接点を探ってきました。

talk baton 04 建築と地元

talk baton 05 建築と農業

＜※脚注＞
「建築と木材」　（建築と社会2014年２月号）
「建築と拡場」　（建築と社会2014年９月号）
「建築と家具」　（建築と社会2015年４月号）
「建築と不動産」（建築と社会2015年４月号）
「建築と庭」　（建築と社会2015年６月号）
「建築と地元」　（建築と社会2015年９月号）
「建築と農業」　（建築と社会2015年10月号）

地蔵盆の風景　写真：前田昌弘

『共のレシピ』

今回の3rd Action「建築と共有」は私たちU-35世代と学生とのコラボレーションの場と位置づけており、世代や業種、地域を越えたつながりをつくるきっかけとなればと考えました。

「共」のレシピという言葉には、素材を組み合わせることで料理を作るように、様々なツールや、空間、手法を掛け合わせることで生まれるアイデア・ヒント集を作ってみたいという思いがあります。

このような思いから審査員には、建築をはじめとして、プロダクトやまちづくりまで、いろいろなデザインに挑戦されており近年は「シェア」をテーマに新たな運営や空間の提案を実践されている猪熊純先生、地域コミュニケーションの継承・発展、平時・非常時の関係という観点で居住環境作りを研究されており、京都や東北の震災復興の調査、スリランカでのフィールドワークにも取り組みをされている前田昌弘先生のお二方にお願いし、快諾を頂きました。

学生を対象にしたコンペティションの開催は、私たちU-35にとって初めての試みでしたが短い募集期間にも関わらず21点もの応募がありました。関西圏以外に東北地方や首都圏から、大学院生、学部生、高専生といった、幅広い世代からのメッセージを受け取ることができたことは非常に貴重なことであり、ご応募頂いた方々、講評会にご参加頂いた方々に深く感謝申し上げます。

U-35委員会Facebookページ

U-35委員会ではFacebookを開設しています。普段の活動内容や、メンバーの雑感などがざっくばらんに書かれています。Facebookをされている方はぜひ一度お立ち寄り下さい。

Facebookアドレス：
https://www.facebook.com/U35.aaj

Member's Forum

会員投稿の頁

U-35委員会 メンバー座談会

2016年４月12日　19：00～

2015年度の活動と、その締めくくりとなった3rd Action「建築と共有」から、メンバーそれぞれが感じたことを振り返る座談会を開きました。

■「公共性」がテーマだった 2015年度のU-35委員会活動

伊藤　2nd Action「建築と拡場」では、うめきた広場を題材に、既成の概念や境界を超えたデザインで新しいマチやコミュニティを創るということがテーマでした。
その後、次のActionに向けた議論は、なかなか方向性を見出せなかった時期がありましたが、メンバーそれぞれが各自の関心や問題意識を見つめ直す中で、実は建築というのは、いろんな専門分野や学問領域の中で横断的に捉えるべきではないかと考え、異なる分野のU-35世代との対談から視野やつながりを拡げていこうと手探りから始まったのが「talk baton」でした。
なかでも「建築と地元」や「建築と街区」では、マチの魅力を高めるために、既存の長屋や町屋といったローカルな魅力をリノベーションによって付加価値を最大化することで良質なテナントを誘致したり、公共空間をまちづくりネットワークという共同体によって管理運営するなど、人が集まり賑わいが生まれる仕組みや空間づくりを個別の建築の枠を超えて取り組む事例と出会うことができました。
メンバーの近況報告の中でも、建築単体では解決できないテーマであったり、社会の課題に対して提案したいという思いが、建築に対するモチベーションになっていたように思います。
つまり、これまでの共同体やコミュニティの存在がベースにあった公共性の良さが、現代の公共空間では切り離されてしまったこと、そして近年SNSや様々なネットワークの普及により空間を介在せずにコミュニティが成立してしまう現状を目の当たりにし、今後、建築や公共の空間をどう定義していくべきなのか、を深く掘り下げたいという点に関心が高まりました。

■3rd Action「建築と共有」を振り返って

興津　課題文を考える上で大切にしたことは、そういった社会観や価値観の変化を、学生世代がどのように肌で感じているのかということ、例えば具体的なシェアハウスのプランの提案はあってもよいが、「レシピ」というキーワードを加えることで、方法論やソフトまで踏み込んだ議論をしたかったということが根底にありましたね。

三谷　そういう意味では、選外となった作品の中にも課題設定や独自の視点を評価したい作品は多くありました。
場所を共有するためのアプリにより生まれるコミュニティのあり方を提案した作品は、直感的におもしろさを感じましたが、すでにアイデアとして実用されている先行事例があったことから入賞には至りませんでした。ただ、「一軒家×家事」の発想と掛け合わせても面白いかも、という議論もありました。

■2016年度　U-35委員会メンバー

伊藤　昭裕（佐藤総合計画）
榎　恭志郎（大建設計）
興津　俊宏（竹中工務店）
駒井　陽次（Style Agency/PARK Lab.）
下田　康晴（東畑建築事務所）
出来　佑也（昭和設計）
中村　祐記（大林組）
長島　　薫（東畑建築事務所）
西森　史裕（大林組）
廣富　　純（佐藤総合計画）
松島　将太（大建設計）
三谷　帯介（鹿島建設）
宮武　慎一（安井建築設計事務所）
森下　大右（昭和設計）
若江　直生（日建設計）
和田佳奈美（竹中工務店）

50音順

座談会の風景

Member's Forum

会員投稿の頁

（参加者）

伊藤昭裕

興津俊宏

出来佑也

三谷帯介

宮武慎一

若江直生

伊藤　同じ興味を持った特定多数の人同士が場所をシェアすることで生まれる新たな繋がりや、それがSNSで発信されることで、場所の魅力がさらに広まったり、という可能性を感じる議論に発展したことは面白かったです。空間提案と同時に、どういう共有のルールや運用のプログラムをそこに描けるかという、リアリティのある想像力・構想力が大切だということもよくわかりました。

宮武　どちらかというと、やはり住宅よりの提案が多い中、既存の商店街やショッピングモールと掛け合わせることで、新しい共有のイメージを生み出そうという提案がとても面白かったです。あとは三谷さんが言うように提出された案どうし、例えば少しソフト的により過ぎていた案と空間的には面白いのにそれを成り立たせるシステムが少し弱いと感じた案なんかを上手に組みわせることで、さらに具体的で新しい提案が可能だと感じることができ、私たち自身とても勉強になりましたね。

若江　私たちも想定できていなかったことは、共有・シェアということに対する猪熊先生、前田先生のスタンスが、個々のプライバシーや権利に対して、非常に緻密に、丁寧に、具体的に考えておられたことでした。アイデアやコンセプトに独自性があっても、「そこに本当にあなたが住みたいか」というリアリティを伴わない提案というのは、無責任なんだと。

「3rd Action」交流会の風景

出来　関西の大学を中心に募集案内の訪問を行ったり、Facebookで告知をしましたが、名古屋や東京、東北の学生までが関心を持って応募してくれて、夜行バスでプレゼンテーションに駆けつけてくれたこと、高専生の応募も多数あったこと、それらがSNSや友達を介した口コミによるものだったことが、印象的でした。自分たちが発信したActionが世代を越えて拡がっていく様子を実感することができて、とてもよかったなと思います。この拡がりをこれからの活動に是非活かしていきたいですね。

三谷　実はActionの後思うところがあって、１人で東北の被災地を巡ってきたんです。普段は美しい海に面する現地はどこも町が丸ごとなくなっていて、あの津波の高さ以上まで地盤を上げる工事が続いている。そして、移転先として海の見えない山の上に新しい町をつくろうとしている。移転前の地区の名前をそこに持ってきても、もう「海沿いのあの町」ではないんですよね。
元々その地区に住んでいた人も数多く転出してしまった状況で、新しい町ができた時にどんな人々がそこに住み、どんなコミュニティが育っていくだろうか。それは今の子どもたちが大人になった頃、つまり次世代に託されているのではないか。そんなことを考えさせられました。
被災地のコミュニティデザインに関わっておられる前田先生のお話が痛切に感じられました。

南三陸町現状全景

■2016年度の活動に向けて

宮武　今回の学生コンペは初めての試みでしたが、期待以上の面白い提案ばかりで、良い議論が生まれたと思います。開催時期や展示期間などを考慮して、次回につなげていきたいですね。

興津　作品を１点ずつ見ながらみんなで議論を出来たことや、審査員の先生と学生との自由なディスカッションができたことはよかったと思います。

三谷　私たちU-35委員会の役割は、同世代の自由な議論ができるプラットフォームを、組織の枠を超えて広げていくことにあると思います。次世代となる今の学生にも、私たちの活動にもっと関心を持ってもらえるよう、継続していくことが大事ですね。

若江　U-35委員会活動の良いところは、規模が小さいゆえのフットワークの軽さや、メンバー同士やゲストと参加者の距離感が近いところだと思うので、それは大切にしたいです。
2016年度は、日本建築協会の100周年にあたります。来年３月の100周年記念行事に合わせて、これまでの経験を活かしながらU-35委員会としての企画を盛り上げていきたいですね。talk batonやActionも、引き続き頑張っていきましょう。